

母子のかかわりを育てる環境づくり ～壁面飾りを通して考える～

小柳 達朗・林 徳子

聴覚障害のある乳幼児に、母子とのかかわりを育てる環境づくりの取り組みとして、かかわりが生まれやすい季節の壁面飾りづくりを考えてきた。

壁面飾りを作製する際にポイントにしたことは、次の三点である。配置は子供の目線の高さであること、構成は子どもの生活経験や興味をもっていることや遊びの様子から考えていくこと、子供が自由に触れ、操作できること。このような取り組みの中で、子供が壁面飾りに興味を示し、そこでの気づきや驚きを母親や教師に伝えてくる場面が見られている。毎月の取り組みの実際と母子の様子から関わりを豊かにする環境づくりについて考察した。

【キーワード】 乳幼児教育相談 壁面飾り 目線の高さ 触れる 操作できる 母子のかかわり

1 はじめに

本校の乳幼児教育相談では、0～2歳の乳幼児とその保護者への支援を行っている。この時期、母親が自分をしっかりと包み込んでくれるという安心感が子供が得られることを大切にしている。

母親に包みこまれる安心感を基盤に人への信頼感を育み、自分から外界や他者と積極的にかかわっていける力につなげることをねらいとしている。そのため、母子間で気持ちを通わせる実感もてるような支援、そしてその機会を生じやすくするための環境づくりを行ってきた。

幼稚園や保育園では、様々な所に装飾が見られる。太田・渡辺（1987）は、次のように述べている。「装飾の特徴は、幼児に親しみを覚えさせ、心の安定をはかり、想像をふくらませ、自然の事象や季節、行事や人の生活を意識化させるように工夫されているところがある。装飾は、幼児の成長発達にかかわる重要な保育環境の要素であるといえる。」

本研究は、以上のことを踏まえた上でさらに、人とかかわりが生まれやすい壁面飾りについて取り

組みを進めてきた。壁面飾りを作製するにあたり、以下の三つの点に留意した。

- ① 配置は子供の目線の高さにする。
（子供が気づきやすく、大人も子供の目線の高さに下りてかかわりやすくなる。）
- ② テーマは、その時期の子供の生活経験や興味、遊びの様子から考える。
（生活と結びつきやすく、それをきっかけにかかわりが広がりやすくなる。）
- ③ 内容は、子供が自由に触れ、操作できるものにする。
（自由にくり返しかわることができる。）

母子間でどのように気持ちを通わせたらよいか悩む母親が、環境の中に置かれている壁面飾りを見て子供と一緒にかかわったり、笑ったりできる機会につなげたいと考えた。探索活動やいたずらなど、子供が自発的に行う活動は、自分の興味に沿って自由にかかわる楽しさや驚きなど、大きく気持ちが動く経験が伴うことが多い。そこで、子供が興味をもって自由に操作することのできる壁面づくりを行った。

2 研究目的

乳幼児教育相談での、母子のかかわりにつながる環境づくりの一つとして壁面飾りを取りあげ、配慮すべき配置、月のテーマ、構成などについて考察する。

3 研究方法

壁面飾りの前で見られたかかわりについて、以下の三点に基づいて記録をする。①子供の様子②母親や教員のかかわりの様子③子供の変化

4 結果

表1は、記録の一部を抜粋したものである。

年間を通して、壁面飾りを作製してきた。今回は、その中で四つの事例を取り上げた。

さなおもちゃをいっぱい詰め込んで歩き回ったり、貼ったりはがしたりに興味をもったりする様子が見られた。このことから、果物狩りをテーマにして作製した。

1歳児では、壁面飾りの前でじっとりんごをみていて関心はあるが、慎重さなどから自分から手を出さなかった子供がいた。教員が「べりってできるよ。やったあ。」とはがしてみせるとその後母親と何個もはがして遊ぶ姿が見られるようになった。また、たくさんの果物を持っている時に「いっぱいだね」と驚いてみせると、笑顔で頷き、満足そうな様子を見せることもあった。母親とは、「なんだろうと思ってみている時には、『なんだろうね。』と一緒に興味を持ったり、『べりってできるよ。』と教えてあげたりするといいですね。」と話し合う機会にもつながった。

(1) 果物狩り (10月)



この壁面飾りは、子供たちが、ままごとの果物を「アムアム」と食べるまねをしたり、手さげ袋に小

(2) 福笑い (1月)



この壁面飾りは、子供たちがアンパンマンに興味をもっていることや、顔の部位に興味をもち始めて

表1 記録の一部抜粋

テーマ	①子供の様子	②母親や教員のかかわりの様子	③子供の変化
歯みがき (6月, 7月)	歯ブラシを手にとり、壁面飾りの動物の歯をみがいている。	母親が「ごしごしシュッシュュッ。」と声をかけている。「ピカピカになったね。上手。」とかがんで拍手をして見せる。	何度も繰り返し、終わる度に母親の顔を見る。
果物狩り (10月)	立ち止まってじっと見る。	母親が「べりべりだつて。」と指さして教える。子供の側にしゃがんで話しかける。	母親と繰り返しはがして笑う。
芋ほり (11月)	芋のつるに興味をもって触っている。	教員が「よいしょってできるよ。」と伝える。「よいしょしたの？すごい。」と繰り返し応じる。	「ヨイショヨイショ」と声を出しながら引っ張る。芋が抜ける度に母親に見せに行く。
福笑い (1月)	顔のパーツを手に取る。	母親が「目だね。」と話しかける。子供の側にしゃがみ、子供の目や鼻を触る。	全部できると母親の方を見て拍手をする。
豆まき (2月)	鬼に新聞紙の豆を投げて当てている。	母親が「えい、やった。」と声をかけて同じ動きをする。また、しゃがんで繰り返し応じる。	満足した様子で、側にいた教員にも投げて当ててくる。

10 母子のかかわりを育てる環境づくり

いることや、季節の遊びであることからアンパンマンの福笑いをテーマにして作製した。

活動の中でアンパンマンの手遊びを行ったり、表現遊びを行ったり、タペストリーが飾られていたりなどとアンパンマンに触れる機会が多かったことも作製にあたった重要な経緯である。

子供たちの目線の高さに配置するだけでなく、お菓子の缶のふたを使って立体的にしたり、また顔のパーツを透明の容器に入れたりすることで子供が気づきやすいように配慮した。この容器から子供たちは自由にパーツを取り出して、母親と顔を作りあげていた。母親は、子供が取り出したパーツの名称を伝えたり、子供がそれを顔に貼った時に「ペタン、上手だね。」などと褒めたりして一つずつかわる様子が見られた。

(3) 豆まき (2月)



(子供の目線から撮影した写真)

この壁面飾りは、子供たちが追いかけてたり追いかけられたりする遊びが好きであったことや、季節の行事として節分があり新聞紙の豆を鬼に投げて当てるという遊びを行っていたということや、当てられた鬼が「ごめん。」と謝ったり逃げたりした遊びの経験から豆まきをテーマにして作製した。これらの経験から、自分から新聞紙の豆を箱からとって鬼に当てたり、ひたすら投げて遊んだりする様子が見られた。その時、近くにいる母親と一緒に鬼に投げたり、母親や教員は子供が投げたタイミングに合わせて鬼を操作したりするなど、かかわりが多く見られるようになった。

(4) おひなさま (3月)



この壁面飾りは、2歳児グループの活動で、母子で折り紙のおひなさま製作をしていたことから、おひなさまをテーマにして作製した。また、子供たちが経験した同じ折り方で、大きいおひなさまを作り壁面飾りに使用した。実際に折ったイメージを持っているため、「パタン、ギュッ (つて折ったよね。)」と興味をもってみたり、母子で伝え合いがしやすくなったりすることをねらいとして作製した。そして、おひなさまの顔を子どもたちの顔写真で作り、自由に貼ったりはがしたり、場所を変えたりできるように工夫した。

1歳児の子供では、まず母親が子供の顔写真に気づき、「〇〇ちゃん、どこかな。」と探し始める姿が多く見られた。子供が自分の写真を見つけると嬉しそうに指さし、母親は視線を合わせながら「いたね。」と応じる姿も見られた。友達顔にも気づき始めると、子どもの指さしに合わせて「～ちゃんだね。」と長い時間やりとりしていることも多く見られた。

0歳児の母親は、「みて～。〇〇がいるよ。かわいいね。あっ△△ちゃんもいるね。」とあかちゃんに語りかけている場面やそっと手を取ってはがせるパーツを握らせている場面もみられた。子供からの発信が見えにくい0歳の時期だからこそ、母親が赤ちゃんに笑顔で語りかけられる場面の一つとして、母親自身が壁面飾りを見て楽しんだり、子供と一緒に触れたりできるような工夫が効果的であると実感した。

5 考察

子供たちの目線の高さに配置することで、ほとんどの子供たちが壁面の前で足を止め、じっとみつめたり、母親の方を振り返ったり、操作し始めたりするようになった。また、母親にとっては、低い位置の配置になるため、母親が自然にかがんだり、しゃがんだりして子供の目線の高さでかかわる場面も多くみられた。そのため、母子のかかわりを増やすために効果的だと再確認した。

また、テーマを子供の生活経験や興味、遊びの様子から考えることで、子供たちのイメージと壁面飾りがつながり、自ら操作しようとする場面が多く見られた。また、作製後も子供たちの様子を見て、飾りの量を増やしたり、内容を工夫したりしたことで子供がより自由に操作をすることができるようになったこともあった。そのため、母親が子供の気持ちや発想を汲む手がかりを得やすく、子供と同じ気持ちで応じるきっかけにつながったと考えられる。このように、作製後の子供の壁面飾りにかかわる様子を丁寧な観察し、改善することで新たな母子のかかわりが生まれた場面も見られた。

また、自由に操作できるものを取り入れることで、子供が同じものに興味をもって繰り返し遊んだり、遊びの順序を変えたりして遊んでいた。その様子を母親が見ることで、遊びの変化に気づくようになった。そこに教師が繰り返し付き合い、応じて見せた後、母親が同様に子供の発信に応じて遊び始めたり、母親自身が、遊びを広げて子供を誘ったりする場面もみられた。

母親からは、「子供が来る度に楽しんで遊ぶので、自分もそばで一緒に楽しくかかわれています。」「家でも同じようなものを子供と一緒に作って楽しみました。」などの感想も聞かれた。乳幼児期は子供とのかかわり方や遊び方が分からない母親も多い。かかわりやすさに配慮された壁面飾りが、母子のかかわりのきっかけになり、母親の嬉しさや意欲につながると考えられる。

6 課題

前述した太田らの研究では、壁面飾りの大切さは理解しつつも、日々の保育に追われ、時間がとれない、費用に限りがある、などといった課題も指摘されている。今回の実践を通して、私達が多くの時間を費やしたのは、作製そのものではなく、母子へのどのような配慮が必要かという話し合いであった。配慮についての情報共有、話し合いは、欠かすことができないものである。今後、話し合われた事柄が、よりの確に、よりスムーズに壁面飾りに活かせる方法を検討していくことが課題になる。また、壁面飾り以外の保育環境についても、母子のかかわりを育てていくための工夫について考えていく必要があると考える。

〔参考文献〕

太田好恵・渡辺義生（1987）

「壁面構成」作成指導の実践的研究 広島文化女子短期大学紀要 20, 45-56, 広島文化女子短期大学